

アガペー（キリスト教的愛）の純粹さはどこに、どのようにあるか

——現代人の疑問に答える——

アガペーはどこが、どのように、無償の愛か

無償の愛とは？

——“見返り”を求めない愛、応分の報酬（報い）を求めない愛

では、それは具体的にはどういう愛か

〔予備的問題〕

A. 誰からの、どういう報いを、どのように求めない愛か

- ①愛の行為をした相手からの①金銭的ないし物品的返礼、②感謝の言葉、③笑顔、④その他（ ）を
②世間からの賞讃を
③神から賜る(i)お褒めの言葉、(ii)感謝・ねぎらい、(iii)祝福、(iv)永遠の命、(v)その他（ ）を

(a)要求・請求しない、(b)予期・期待しない、(c)願望・希望しない、(d)その有無に注目すらしめない

愛

の国の実現

B.愛の行為がそれを行った自分自身にもたらす結果——①喜び、②平安、③高揚感（自分が愛において高められた思い、同様の愛の行為への一層の意欲、「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さ」に生かされて与った思い）——を味わうことは無償の愛にふさわしいか？それともふさわしくないか？

C.以下の聖書の箇所（マタイ6：1～6）で、「報い①」と「報い②」は上のどれに当たるか。
「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意なさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報い（報い①）をいただけないことになる。だから、あなたは施しをするときは、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報い（報い②）を受けている。施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。（報い①）。祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報い（報い②）を受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる（報い①）。」

D.「善いサマリア人の譬え話」（ルカ10：25～37）の善いサマリア人は以上の「無償の愛」の点でどうだったと思われるか。

本論：

◆予めの共通理解

§1. 「無償の愛」とは（イ）応分の応答を現実に受け取らない愛のことか。それとも（ロ）応分の応答を期待・願望・希望しない愛のことか。おそらく、（イ）はもちろん無償の愛だが、（ロ）の応分の報いを期待・願望・希望しない場合も無償の愛とみなされるだろう。

§2. 私たちは通常物品の贈り物をするような場合以外は、相手からの「お返し」ということあまり意識しない。困っている人がいれば、ともかく助けようという気持ちで一杯で駆け寄り、教会で奉仕する場合には定められていることをただ黙々と行うだけである。だから、こういう行為は「無償の愛の行為」だと言いたくなるかもしれないが、しかしそれは問題だろう。仮に助けようとしたのに、当の相手から「何をするか！」と怒鳴られたら、むっとするだろう

し、少なくとも予期しなかった反応に遭ったと感じるであろう。奉仕の場合でも同じであろう。ということは、通常は「お返し」を表立って意識してはいなくても、意識下では、つまり無意識の内には、意識しているのである。以下の考察は、その意識下の意識にまで目を向けなければならない。

◆A、Bに対する私の考え

①

アガペーは④通常の手相手に対しては、つまり、極度の逆境の中にあり続けたために人間性を破壊されていることがない相手に対しては、少なくとも②感謝の言葉、③笑顔、④その他（親切のお返し）を(b)予期・期待するであろう。従って無償の愛でないだろう。

②感謝の言葉、③笑顔、④がいつも全くない相手には、何か変調を来すことが起こっていないか、心配し、確かめ、事実それが起こっているなら、助けようと動くであろう。つまり人間性を損なわれている人が相手である場合、その人が人間性を回復することを願って、目指して、それにふさわしいことを模索し、手を打つことに努めるだろう。それが達成されるまでは②感謝の言葉、③笑顔、④その他（親切のお返し）がないことをしっかり受け止め、暖かい言葉や親切を与え続けるであろう。ということは、応分の応答を期待し続けるのであり、(イ)の意味では無償の愛だが、(ロ)の意味では無償の愛ではないだろう。

③深刻な逆境のために、或いは認知症その他の疾患のために、人間性の回復が見込まれないときには、最後までいずれの応答がなくても、それを受け止め、暖かく包み、助け続けるであろう。これは(イ)、(ロ)両方の意味で無償の愛であろう。

②

世間からの賞讃を予期・期待してよいかどうかは、次の二つの場合によって分かれるだろう。自分の親切な行為が世間に知られて、世間から賞賛されたいと願うことは、Cの「見てもらおうとして、人の前で善行をする」ことに該当し、クリスチャンのアガペーには許されない。その意味では無償の愛である。しかし自分の行為が本当に相手に対して行き届いた善い行為であったのかどうかを判断する一つのものさしとして、わざわざ知らせたのではなく、自ずと知られたところが世間でどう評価されるかに気を付けていることは大事であろう。（例えば、教会の附属幼稚園が世間でどう受け止められるかに注意している、など。もちろん、明らかに神の教えに従っている確信があるときには、世間がどう見ようと敢然と進むことが求められるだろうが。）全体をまとめれば、神の教えに従うことが第一の基本である点を押さえた上で、「基本的には無償の愛であるが、有償の場合もある」であろう。）

③

神から賜る(i)お褒めの言葉、(ii)感謝・ねぎらい、(iii)祝福、(iv)永遠の命、(v)その他 ((1)天国での神を中心にした永遠の平和、(2)地上での神の国（神がいわば王として治められるアガペー共同体）の実現）を(c)希望しながら、更には「信じ」ながら、アガペーを実践することは許されているのではないか。それがC（マタイ6：1～6）で言われている、「隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」「報いA」ではないか。もちろんこれを応分のものとして

(a)要求・請求したりしては絶対ならない。そもそも希望すると言っても、当然のこととして希望するのは、自分にこれらのことが与えられるのは、受けるに値しない自分への神の絶対的な「恵み」として、身に余る光栄として、震える思いの内に受け止める者に対してのみ、これらは与えられるであろう。そういう条件と意味においてのみではあるが、この場合は有償の愛の行為であろう。

B.の、アガペーの行為が自分自身にもたらす結果としての④喜び、⑥平安、③高揚感を受け取ることは筋の通った、理に合った「報い」と見てよいか。そして、これを受け取るのであるから、アガペーが神に従う行為は有償だと見てよいか。よいのではないか。山上の垂訓の「幸いなるかな、～する者」は神に従うことが幸いであり、このことを裏付けていると思われる。神に従うことは④喜び、⑥平安、③高揚感を実際に受け取るという意味でも、また④喜び、⑥平安、③高揚感を与えられる期待・希望・信仰の内に神に従うことは許されるという意味でも、アガペーは有償の行為ではないか。

†但し、上のいずれの場合であれ、行為者が「報い」を受けることが「目的」となり、親切な行いがそれを得るための「手段」と考えられるなら、逸脱であり、絶対に許されない。¹どんな場合も、行為者が「報い」を受けるために親切を行うということがあってはならないという意味では、すべては無償の行為である。報いは困難で辛い親切の行為のさなかに力を与えてく

¹ 例えば自分が天国に行きたいから、その目的達成のために電車の前に身を投げることは逸脱である。目指すことはどこまでも人々を助けることでなければならない。或いは「困難の中にある人々を助けよ」との神の命令に従うことでなければならない。そのように一途に人々の幸い・神の命令の一点だけを目指して身を投げることは無償の行為である。ただ、信仰者の青年運転手の場合には、身を投げる瞬間、既に天国に自らがいる幸いが思い浮かんでいて、そこへ向かって身を投げる思いだったということは十分考えられるが、それは逸脱でないであろう。天国での幸いは「副次的」なのである。そのように天国での平安は救難行為を副次的に助け、支え、導くのであり、そこを捉えれば「有償」の行為である。因みに、思い浮かべられている天国での幸いの姿は彼一人が神の下にある幸いではなく、助けられる人々全員と共に神の一つになっている幸いの姿であろう。

とってプラスだから行うのであれば、人はそのプラスのものを得るために行うのであり、つまり無償ではないでしょう。

更に一言加えれば、既に見たとおり、大哲学者・アリストテレスは人間はどんなことを行う場合も、最終的には自分の幸福を得ることを目指して行うのだと言いましたが、これを否定する人は、できる人は、いないと思われま

こうして、どんな行為も、アガペーの行為も、人は最終的にそれが自分にとってプラスだから行うのですが、最終的には自分の幸福を目指して行うのですが、そしてそれを有償だと言われれば、認めざるを得ないように思えるのですが、しかし私自身は「有償か・無償か」という問題はこれ以上続けることには余り意味がないと思います。それはまだまだ続くかも知れませぬ。しかしここで根本から新しく問うべきことは、「アガペーは無償でなかった場合、一体それによって純粋な行為でなくなるのか」ということです。私ははっきりと、それはそうではありま

せん」と答えます。多くのクリスチャンがアガペーは無償の行為だと考えるのはなぜでしょう。それは、無償の行為でないアガペーは純粋な行為でなくなってしまうと考えるからではないかと思

います。しかし無償でないからといって、直ちに不純になると決まるのでしょうか。そうではありません。不純な場合と不純でない場合との両方があります。そこをよく見究めなければなりません。不純な場合と純粋な場合とがあるとするならば、それはどこで分かれるのでしょうか。行為が純粋か・不純かを見究める新しいものさしとは何でしょうか。

それは「無私」であるか、無私でない（「有私」²⁾）かだと思います。人間性を失った人を助け続ける人も、助けられない人も、それぞれそうすることが自分にとって「プラス」だからそうするのですが、二人の間には或る決定的な違いがあり、それは「無私」であるか・ないかです。「無私」であるとは、私（自分）がないということではありません。そうではなく、いわゆる「エゴ」がないということ、つまり利己的な、自己中心的な、自分がいないということです。助け続ける人は自己中心ではなく、相手中心なのです。自分のためにも使える多くの時間や労力や費用を、自分のためではなく、相手のために使うのであり、その分相手中心に生きているのです。身を投げた青年は本来どれほどか大きな喜びの内に生きることができたか知らない自分の生涯を犠牲にして人々の生きる喜びを優先したのです。この自己中心の「私」がないこと、「無私」が行為を純粋な、そして崇高な、聖なるものにするのです。しかも当人が無私に生きることを望んだ以上、それは彼にとって喜ばしいことであり³⁾、満足な生涯であり、無償ではないはず⁴⁾です。

「無償」と「無私」とは同じではありません。アガペーは無私であることによって純粋であり、崇高であり、聖なのです。

「無私」と言っても、「私」がなくなるわけではなく、あるのではないか、という疑問が起るかも知れませぬ。もちろんそうであり、先程も言ったとおり、「無私」と言っているときの「私」とは単に「我」とか「自分」とか、「己」とかいう意味ではなく、「我が強い」というときの「我」、「自分中心」である「自分」、「利己的」である「己」のことです。無私である場合、つまり「自己中心的」でない場合には二つの場合があります。〔1〕相手が中心である場合と、〔2〕相手と自分とが両方とも中心である場合です。「AがBより中心」の場合を数学的記号を借りて「A>B」と書き表すとすれば、自己中心は「相手の利益・幸福<自分の利益・幸福」であるのに対して、無私の場合とは「相手の利益・幸福 \geq 自分の利益・幸福」であり、つまり〔1〕相手の利益・幸福>自分の利益・幸福 および〔2〕相手の利益・幸福=自分の利益・幸福 の場合です。二つの場合の内、最初に目指すべきなのは〔2〕の「相手の利益・幸福=自分の利益・幸福」でしょう。しかしそれが何らかの困難であるときには、喜んで〔1〕の「相手の利益・幸福>自分の利益・幸福」を引き受けるのでしょうか。

アガペーは無償の愛であるから純粋だと考えてきた人は、本当はアガペーは無私の愛だから

2 「有私」という言葉は、ここで本邦初に私が使う言葉ですが、その「私」は言うまでもなく、「エゴ」、自己中心的私です。

3 無私に生きる人はそう望んだ通りに生きているのだから、それは自分の喜びであり、無償ではないと言っているときの「喜び」（これを①とする）と、無私に生きる人は相手の喜びを自分の喜びよりも優先していると言っている場合の自分の「喜び」（②とする）とは同じではありません。「喜び」（②）は例えば自分のお金を自分のために使う喜びであるのに対して、「喜び」（①）は「喜び」（②）を犠牲にして他者のために生きること（自己犠牲の、無私の、生き方）を選んだ以上、その通りに生きることが喜びであるという喜びです。「喜び」（①）は自らの生きる方針に沿うことの喜びです。

4 電車が近づいているホームから誤って落ちた盲人を救おうと、追いかけて飛び降りて犠牲になった韓国の青年がいましたが、その人が信仰を持っていなかった場合には、神様からの永遠の祝福を得る本望もなかったものであり、彼こそ無償の愛を生きたのではないかと疑問があるかも知れませぬ。しかし盲人の命が助かったなら、それこそ彼が望んだことだったので、やはり彼は盲人の命が助かったときの、盲人と自分の共々の喜びを目指したのであり、有償を目指したのでしょう。ですから無償ではありませんが、しかし「無私」で、「相手中心」ですから、崇高なのです。

純粹だと言うべきところを間違えて考えたり、言ったりして来たのではないか⁵。——そう私には思えるのですが、どうでしょう。

「アガペーが無償の愛かどうかという問題は、今では、以前ほど深い関心の問題ではなくなっている」と先程私は言いましたが、そのことはキリスト教の宣教にとってマイナスなことではない、と今や言えるでしょう。無償であるかどうかではなく、無私であるかどうかこそが行為の純粹さのものさしなのであり、アガペーはその無私の純粹さを永遠に持ち続けるのですから。

以上、私たちはもっぱら人間のアガペーが無償かどうかを見て来ましたが、最も純粹な神様のアガペーは無償なのか、そうでないのか、はどうでしょうか。私は冒頭の部分で、神様は、太陽の光と熱のように、尽きることのない愛を無限の広さと長さに亘って私たちに注ぎ続けて下さるのであり、その神様の無尽蔵の愛に対して何かお返しができるかと言えば、太陽に対してお返しができないように、できないと述べました。神様だけはお返しを一切求めず、永遠に被造物を愛し続けられるのでしょうか。

しかし自由を与えられていない被造物に対してはそうでしょうが、自由と責任を与えて創造された人間に対しては、まさに自由と責任ある然るべき応答を求められておられるのではないのでしょうか。即ち、感謝することを求めておられるのではないのでしょうか⁶。また神様の愛に従い、生かされつつ、隣人を、敵までも含めて、尊び愛することを、いえ、自分自身をも尊んで愛することを、要求しておられるのではないのでしょうか。これがどうして「無償の愛」でしょうか。神様は私たち人間に向かってご自身の愛にふさわしく応答することを要求しておられるのです。ですから、決して無償の愛ではありません。しかし、だからといって、神様の愛は純粹ではないかと言えば、そんなことは全くありません。なぜなら神様には「エゴ」——自己中心の我——は一点たりともなく、極限まで「無私」であられるからです。そのことが決定的に示されたのがイエス様の十字架でした。「神は、その独り子をお与えになった（——それはご自身が地上に降ったことと同じでした）ほどに、世を愛された。独り子（ご自身と同じです）を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3:16）神が罪深い人類のために身代わりにその罪の刑罰を受けられた。それほどまでに自己中心とは正反対に、人類中心であってくださった。——そこに神のアガペーの極みの「無私」を私たちは見るのであり、言い表しようもないアガペーの純粹さを見るのではないのでしょうか。



ところで、以上の考察の結果は既に見て来た「アガペーは尊びの愛である」ということとどう関連

するのでしょうか？以上見てきたことの中には、アガペーは尊びの愛であるということが根本にあるということが見て取れるのでしょうか？既に配布した「アガペーの十字架像」の図をもとにしながら、その点を見ましょう。

この図にはアガペーが①神→人、②人→神、③自分→隣人、④自分→自分、の四つの場面で示されていました。今回の考察はこのそれぞれにどのように関わるのでしょうか？

まず、①神→人及び②人→神についてみれば、神は人間に対するご自身の愛において、その愛からの恵みに対して人間が感謝の応答をすることを求めておられることを見ました。それだけでなく、その恵みを当然のこととして受け止めるのではなく、自分はそれに値しないという身も縮まる謙遜の思いの内に受け止めることを教えておられることを見ました。これは①、②とどう関係し合うのでしょうか。

このことは、まず、②人→神のアガペーがどのようなものであるかを詳しく明らかにしているのではないのでしょうか。つまり「尊ぶ」とは既に配布した資料「『尊ぶ（尊び）』とはどういうことか」で見たように、「自分を低く見、また低くし、相手を高く見、また高める」ことですが、②人→神のアガペーは神からの恵みを自分はそれに値しないという身も縮まる謙遜の

⁵ 「無償の愛」にずばり相当する英語はないようです。ほとんどの辞書で、「無償の愛」は *love that asks nothing in return*. と出ます。興味深いことですが、*unselfish, selfless* と訳している辞典も少なからずあります。そうなれば、「無償」ではなく、「無私」です。*work without compensation* とか、*gratuitous service* とか、*gratuitous help* とは言うようですが、しかしこれらは要するに報酬が無いことだけを言っていないのでしょうか。「無償のヘルパー」は *unpaid helper* と出ます。これに対して、「無償の愛」の「無償」は金銭的報酬がないことに留まりません。ハビエル・ガラルダ『アガペーの愛・エロースの愛』（講談社新書）には「無償の愛」が用いられていますが、これは著者が初めから全文を日本語で書いている中でのことであって、欧米語の訳語として用いているものではありません。

⁶ イエスが感謝があるべきだと言われたことは、皮膚病を癒されてイエスのもとへ感謝しに帰ってきたサマリヤ人を賞賛されたことに示されています。（ルカ17:12-19）

思いの内に受け止め、深甚の感謝を神に献げるということであることを明らかにしているのではないのでしょうか。それは人→神の尊びの愛が具体的にどのようなものであることを示しています。

同時にここには①神→人のアガペーがどういうものであるかも示されているでしょう。神は人間がご自身の恵みをへりくだりの内に受け止め、深甚の感謝を献げることが求められる。これは人間をダメ人間にならせず、人間を、人間性を、高めることであり、神の人間に対する「尊びの愛」のまざれもない姿ではないのでしょうか。

同時にまた、考察したことは③自分→隣人、④自分→自分の場面での「アガペー＝尊びの愛」が具体的にどういうものであるかも教えています。隣人からの厚意を身も縮まる謙遜の内に受け止め、心から感謝することが隣人を尊び愛すということなのであり、またそれは同時に自分が自分をダメ人間に貶めることなく、自らを人間として高めることでもあるのです。